

令和6年度第1回利用者懇談会議事録

令和6年度 第1回 生涯学習センター利用者懇談会
日時： 令和6年9月13日（金） 19時00分～21時00分
場所： 東久留米市立生涯学習センター 学習室4
出席者： 利用者懇談会委員 【学識経験者】2名 【利用者代表】3名 【指定管理者】施設長、設備管理責任者 【関係行政機関職員】生涯学習課長 事務局 【指定管理者】副施設長 8名の委員の内8名が出席、過半数の出席にて会議を開催 欠席者：生涯学習係長（公務の為） 開催の目的 指定管理者が管理運営を行う東久留米市立生涯学習センターの指定管理期間中の運営を適正かつ円滑に行うために、市民のご意見等を伺う場として利用者懇談会を設置する。
議題： (施設長) 「生涯学習センター利用者懇談会設置要綱」には「第3条 懇談会は、委員10人以内で構成する。」とあり、現在委員の方は合計8名。 本日は、8名中8名の委員にご出席いただき、「生涯学習センター利用者懇談会設置要綱」第6条に定める「過半数」に達していることをご報告する。 これまで同様当懇談会は原則として公開扱いとなり、事前に傍聴希望者へのご案内をHPに掲載している。傍聴希望者がいる場合は後ほど入室していただく。（→傍聴者なし） 今回の議事録については前回同様、後日委員の皆様にご確認いただいた後、センターHPで公開する。 それでは会を進めるにあたり、初めに本日用意した資料を確認させていただく。 <配布資料> 1. 次第 2. 資料1 令和5年度 東久留米市立生涯学習センター利用統計 3. 資料2 令和5年度 東久留米市立生涯学習生涯学習センター事業一覧【実績報告】 4. 資料3 令和6年度 東久留米市立生涯学習センター利用統計 5. 資料4 令和6年度 東久留米市立生涯学習センター事業一覧【報告及び今後の予定】 6. 資料5 令和6年度 施設維持管理報告【実績並びに今後の予定】 7. 資料6 東久留米市立生涯学習センター利用者懇談会委員名簿
1. 開会（進行役 施設長） それでは次第に沿って進めさせていただく。次第の1～4までの進行を私のほうで務めさせていただく。
2. 市担当者紹介（生涯学習課より自己紹介と挨拶）
3. 設備管理者、事務局紹介（設備管理責任者、副施設長より自己紹介と挨拶）
4. 会長挨拶 私はこども家庭福祉を専門としている。3月にフィンランドへ出張したのだが、今回の出張を通じて特に強く感じたのは、こどもが幼い頃から1つの「好きなこと」を見つけ、それを続けていくことの重要性である。1人1人の個性を伸ばすためには、自分が何を好きなのかをしっかりと感じ、見極めることが必要であり、

その「好きなこと」は生涯にわたって続き、こどもの将来に良い影響を与える。幼少期に好きなことを見つけることが、学力向上や幸福感につながる。

例えば、世界一の学力を誇る国や、幸福度が No.1 であるフィンランドでは、1人1人が自分の好きなことに取り組める環境が整っている。これは、生涯学習の理念とも深く関わっていると感じた。

本日も多くの意見が寄せられることを期待している。

5. 報告（進行役 会長）

次第に沿って、令和5年度事業実績「運営・自主事業」に関して施設長より、「施設維持管理報告」を設備管理責任者に報告をお願いする。

（施設長）

【資料1】令和5年度 東久留米市立生涯学習センター利用統計

第3期指定管理期間の4年目となる令和5年度は、前年度より続く急激な世界情勢の変化に伴う大幅な光熱費高騰という状況下ではあったが、光熱費高騰分を想定した予算組みのもと安定した運営を行うことができた。新型コロナウイルス感染症については、5月より5類感染症に変更され、それにもない利用者の活動が日を追うごとに回復してきた。運営3期目として掲げている基本理念である「学び、つながり、活力あるまちの拠点へ」のもと、地域連携・協働をさらに推進し、市民の皆様にとって、生涯学習センターが生涯学習活動に取り組むきっかけとなり、個人の学習の成果が東久留米市の活力となる生涯学習の拠点としての機能を果たせるように努めてきた。

施設利用統計では、引き続きパーテーションの老朽化による不具合により、集会学習室1の利用は停止している。

令和5年度の利用件数は8,134件（前年対比108%）、利用人数121,219名（126%）、対前年度25,133人増という結果だった。コロナ禍前平成30年度が13.6万人だったので、そこまでには及ばなかったが、令和元年度11.7万人を超えることが出来、昨年度と比較すると大きく利用は回復している。

【資料2】令和5年度 東久留米市立生涯学習生涯学習センター事業一覧【実績報告】

全館イベントとして、東日本大震災以降毎年実施しているチャリティイベント「まろにえ祭り」を昨年度はコロナ禍前の規模に戻して実施した。昨年度はテーマを「減災～避けられない災害に備える～」とし、参加者数は過去最高の3,970名を記録した。1階ロビー・1～2階階段・2階廊下を使用し、写真展「フクシマ-東日本大震災から12年」を実施。「ロビーパフォーマンス」内では、「いきなりAED」と題して、いざというときに備え、AEDを使用した救命活動を体験する訓練を突発で実施し、出演者・来場者を交え緊張感のある体験となった。チャリティイベントとしては各階に募金箱設置と団体による寄付を募り、全体で130,011円を内閣府政府窓口経由で被災地へ寄付を実施した。

ホール事業においては、様々なジャンルや世代を対象とした10公演を実施。市内在住で紅白歌合戦出場経験もある木山裕策氏と歌声カルテットによる観客参加型の「昭和歌謡コンサート」、シンガーソングライターでSING LIKE TALKINGのボーカルなどでも活躍する佐藤竹善氏とピアニストで音楽プロデューサーとしても活躍する塩谷哲氏のユニット『SALT&SUGAR』のコンサートはチケットがほぼ完売となり大好評だった。市外からの来館者も多かったため、東久留米市の良さを知って頂くことを目的に東久留米市の特産物（柳久保小麦のお菓子、お好み焼き粉等）の物販を行い、こちらもご好評を頂いた。人気落語家による「まろにえ寄席二人会」もほぼ完売となり大変好評だった。さらに新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から前年度まで見送っていた「アウトリーチコンサート」「サークルフェスタ（事業計画書イベント名：市民パフォーマンスコンテスト）」を昨年度開催した。サークルフェスタは「やりたいこと探し」「生きがい探し」「仲間づくり」をしたい個人の方と、生涯学習センターで日々活動しているサークルとのリアルマッチングの場として初開催した。その他、市民参加型「まろにえクリスマスコンサート」「みんなのクラシックコンサート」、親子で鑑賞できる「まろにえびよびよコンサート」、親子向けミュージカル「アルプスの少女ハイジ」、クラシック「金子三勇士と行く、ピアノ名曲の旅」の計10公演を開催し、市民の皆様よりご好評をいただくことができた。

各種教室・講座では、小中学生を対象として放課後の時間帯に色々なジャンルを体験する「放課後講座」を実施し、昨年度は職場体験で実習に来ていた中学生に講師として参加いただいた。市民協働型事業としては、

みんなで協力して避難所をつくる体験型講座「みんなで避難所体験！防災サバイバル」、のんびり地域を散策し地域の良さを再発見する講座「東久留米てくてくさんぽ」を提案、大人向け講座では毎年好評をいただいているスマホ教室や、田無警察署、市消費者センター、市防災防犯課による様々なジャンルのプロから身の回りに潜むキケンについて学ぶ講座「知って安心！防犯出前講座」を提案したりと幅広い層を対象とした講座を開催し、様々なジャンルの内容を楽しく体験していただいた。

資料2は、前回の懇談会から3月の実績を追加した内容となっている為、3月の実績の2事業について説明させて頂く。（金子三勇士と行く、ピアノ名曲の旅（3月31日公演）、まろにえサークル見学会）

「施設維持管理報告」については、前回報告より追加は発生していないため割愛する。

意見・感想

（利用者代表）

ボーイスカウトは毎回サークル見学会に参加していると思うが、見学者が当日いなくても、そのために展示の準備をしたりして本人たちはモチベーションが上がっていると思う。ただ見学者が少なくなっているのは残念である。

（市）

月曜日の利用者数は中々昔から利用者数が伸びない難しい曜日だといわれているが、月によっては10月と1月のシェア・利用者数の数値が高い。この月の数字が上がっている要因は何か。

（指定管理者）

10月は市民文化祭、1月は成人式の影響を受けている。祝日の有無で月曜の数字はだいぶ変わる。月1回の休館日が浸透してきており、利用が安定しつつある。

（会長）

小中学生対象の放課後講座はどのような申込者が多いか。

（指定管理者）

低学年中心でリピーターが多い。また新年度は学年が入れ替わったことで、リピーターの兄弟の方が新規で申し込むケースが多い。8月だけは夏休み期間中ということもあり講座定員を多くしている。

（会長）

外国にルーツを持つ方が参加できる企画はあったのか。

（指定管理者）

放課後講座にクリスチャンアカデミーのこどもの参加はある。また、前回の利用者懇談会にて高校生との協働・取り組みへのご意見が出ていたことをふまえて、施設利用で来館されたクリスチャンアカデミーの高校生にアプローチはしてみたが話が進展しなかった。まろにえ祭りでは出展者としてネパール・パキスタンのNPO団体の出展があり、その団体のクラスのこども達が一般参加者として来場があった。

（利用者代表）

事業の中に「市民協働」のコンサートがあるが何を指して言っているのか。

（指定管理者）

昭和歌謡コンサートでは、スクリーンに歌詞を投影し、市民参加型として一緒にコンサートを作り上げるという意味で市民協働のコンサートという位置づけとしている。

（会長）

次第に沿って、令和6年度事業計画について「運営・自主事業」に関して施設長より、ならびに「施設維持管理報告」を設備管理責任者に報告をお願いする。

（施設長）

【資料3】令和6年度 東久留米市立生涯学習センター利用統計

「1.月曜日利用者推移」

8月までの累計構成比は5.8%という状況。前年度対比のシェアベースでは0.8%アップ。要因としては、祝日にホール利用があり利用人数が増となっていることによるもの。

「2.午後利用者推移」

令和6年度の8月までの午後利用合計実績は利用件数1,492件、利用人数で13,295名。前年度8月までの累計が利用件数1,442件、利用人数が14,098名なので件数で見ますと前年比103%、利用人数で見ますと94%と前年基調の推移となっている。

他の時間帯別の利用人数で比較すると、前年対比で午前中が94%、夜間が96%という推移。

「3.生涯学習センター利用実績」

全体的な利用総数は8月末までの前年比で、利用件数、利用人数ともに100%、2018年対比で、利用件数90%、利用人数で83%と回復傾向。ホール利用は昨年度は好調に推移していたが、本年度は、利用件数94%、利用人数で110%と前年基調となっている。昨年度までは、保谷こもれびホールや練馬文化会館が改修休館であったこともあり、東久留米に新規登録で利用する団体も増えていたが、5月に改修オープンしておりひと段落ついた感ある。

今年度は13万人まで利用者数を何とか回復させたい。今後自主事業のホール公演が7公演控えているので、しっかりと集客を行っていくことや、今年の3月末にフリーWi-Fiが2階すべての学習室と1階和室でも利用可能になったこと、またSNSではXを新設しているので、それらの周知をさらに推し進め、新規の利用者を増やしていきたい。

【資料4】令和6年度 東久留米市立生涯学習センター事業一覧【報告及び今後の予定】

<全館イベント>

- ・東日本大震災・能登半島地震被災地復興支援チャリティイベント「まろにえ祭り2024」

<ホール事業>

(実績)

- ・歌声カルテットの昭和歌謡コンサート(4/22、7/2)
- ・《0歳から入場可能♪》まろにえびよびよこんさーと
- ・12人のヴァイオリニストコンサート2024
- ・シルビアクラシックコンサート

(予定)6事業7回

- ・まろにえ寄席宮治・わん丈二人会
- ・歌声カルテットの昭和歌謡コンサート(10/7、1/24)
- ・ミュージカル シンデレラ
- ・まろにえ★クリスマスコンサート
- ・ポピュラーミュージックコンサート(企画中)
- ・まろにえサークルフェスタ

<アウトリーチ> 1事業

<生涯学習事業>

(実績)

子供向け講座としては、放課後講座を4月～毎月1回の計5回、毎年恒例の夏休み自由研究講座を4回、ダブルダッチワークショップを実施致しました。

大人向け講座としては、好評頂いておりますスマホ講座、だれでもアート講座の2講座を実施。

市民協働型講座は、みんなで避難所体験！防災サバイバルを実施致しました。

(予定)

- ・放課後講座を9月～毎月1回の計7回(企画中)
- ・スマホ講座(基本・応用)
- ・親子参加型講座2講座「おとなも子どもも三原色粘土でクリスマスケーキをつくろう」
- 「親子で星空を観察しよう」

<その他>

- ・夏休み学習室開放
- ・サークル見学会
- ・東久留米市スポーツ健康ウィークパネル展

(設備管理責任者)

【資料5】令和6年度 施設維持管理報告【実績並びに今後の予定】

冷却塔のVベルト交換、水槽のフロートスイッチ交換、自動ドアセンサー交換を実施。

今後は自家用発電設備の消耗品交換、センター前の木の伐採、ガス漏れ検知器交換、空調機の修繕を予定。

意見・感想

(利用者代表)

館内の故障箇所が多くなっている。元々の市の計画では大規模改修できれいになっている予定だった。

(利用者代表)

学習室開放はどんな人が多く来ているのか。

(指定管理者)

学生が多く、家族で来ているケースがある。

(利用者代表)

まろにえ祭りは参加人数も寄付額も多かったが、頭数で割ると寄付金が少ないのではないか。

地下に対しての人流が少なかった。例えば写真付きの出展者紹介の場所を館内に設置して人の行き来を流す仕掛けをするなどしてはどうか。動画でなく写真というのが大切で、動画と違いずっと見ている必要がない。

(指定管理者)

次回実施の際に検討していきたい。

(利用者代表)

12人のヴァイオリニストコンサートについて、時期的に台風が発生していた時期だった影響もあり客足が伸びなかったのではないか。告知は見ている人は見えて、家庭内での話題にも上がった。

外部向けの告知は引き続き積極的に行っていただきたい。

(利用者代表)

・体験学習の大切さ。コロナ禍で幼児期の大切な時期に体験学習をする機会が少なかったことも大きく影響していると思うが、例えば先日川清掃の際に川へ降りるための4段のはしごの安全な降り方が分からない子どもが多くいるのを目にした。実際避難するときには避難梯子を使用するケースが出てくるので、まろにえ祭り等で「避難梯子の降り方知っている？」などのリーフレット等をもらえると、そのような子どもたちを啓発出来ると思う。集合住宅の防災委員を務めているが、避難はしごを実際に降りると自分の握力が必要なことを実感する。実際に体験することはとても大切。

(利用者代表)

東北地方での木の倒木による死亡事故がニュースになっていたが、センターのケヤキは大丈夫なのか。

(指定管理者)

複数の専門家に木を見てもらった。余程のことがない限りは数年で折れることはないというお話を頂いているが実際に何かあってから遅いので今年度実施できたらと考えている。木の根元は残す予定で、枝分かれして死んでいる部分を切り落とす予定。木そのものが腐らないかどうかは実施してみないと分からない。

(市)

木の種類ごとに伐採に適切な時期があるので、良い時期を見て実施してもらいたい。

6. 自由討論

意見・感想・報告

■インクルーシブな生涯学習についての議論

(0歳児から参加可能のクラシックコンサートにおける、こどもの声へのクレームから)

[全体要約] インクルーシブな生涯学習について、主に多世代間の交流やこどもや家族が参加しやすい環境づくりの重要性が議論された。こどもから高齢者までが一緒に学び、交流できる場が必要とされ、特に親がこどもにマナーや安全を教える機会を提供するための親の学び、大人の学びが強調された。クレームを学びの機会として捉え、地域社会の人間関係づくりへの新しいアプローチとして、それら課題を解決するための学習機会を創出することが今後のセンターの大切な役割ではないかということが議論された。

(利用者代表)

- ・こどもたちが学びやすい環境、上の世代から子育てを学ぶことができる機会をつくるべきだと思う。特に地域社会がこどもたちの行動にもう少し寛容になればならない。昔は近所の大人たちがこどもを見守っていたが、今では他人のこどもに注意するのが難しくなっている。
- ・確かに今は他人のこどもに注意するのはハードルが高い。生涯学習センターなどの公共施設で、親がこどもにマナーや安全を教える場があれば良いと思う。そういった機会を提供することが、将来の社会のために重要。例えば、入浴施設でのマナー（走ると危ない等）や公共の場での振る舞いを学ぶ場が必要だと思う。親がこどもに正しい行動を教えるためには、学ぶ機会が増えなければならない。
- ・多世代間の交流をもっと進めるべき。大人とこども、さらに高齢者が一緒に学べる場を増やし、多世代の人々が自然に触れ合えるような環境を作ることが重要。

(会長)

- ・大人が、その国の将来を担っているこどもに対し、寛容に接することには非常に大きな意味がある。
- ・クレームも学びの機会にするべき。利用者からのフィードバックをただの不満と捉えるのではなく、改善のための貴重な情報として活用していくことが大切。クレームを言った人の意識が変わるきっかけでもある。年長者のうるさ型の方と若いパパママが一緒になることで生まれる学びもある。
- ・これからは、誰でも参加できるインクルーシブな講座を増やしていくことが必要。特に年齢や背景に偏りのない、幅広い層が参加できる場を作ることが課題。

(副会長)

- ・我々も大人も知識をアップデートしていかなければならない。それは生涯学習では大切な視点である。

■項目別記述

[1] . こども向けイベントの実施とその課題

0歳から参加可能なイベントにもかかわらず、こどもたちの騒音に関する苦情があったことが報告された。こどもが参加するイベントに関しては、静粛を保つことは難しいが、今後も同様の状況が発生する可能性が高い。

少子化が進む中、こどもの参加機会を奪わないようにするための環境作りが必要であり、参加者に同意書や整理券を通じて了承を得る体制を整えている。

今後はさらに改善に向けた取り組みが必要とされる中、参加者の相互理解の場でもあることを確認した。

[2] . こどもたちの地域社会参加と地域の寛容さ

こどもたちが学びやすい環境、年長者から子育てを学ぶことができる機会をつくるべきとの意見があり、特にこどもに対して地域社会における寛容さが重要であることが強調された。昔は近所の大人たちがこどもたちを見守る文化があったが、現代では他人のこどもに注意することが難しくなっているとの声が上がった。

生涯学習センターなどの公共施設で、親がこどもに適切なマナーや安全を教える機会を提供するべきだという提案があった。

[3]．親とこどもの学びの場

親子で学べるイベントや講座の必要性が提案され、特に入浴施設でのマナー（走ると危ない等）や公共の場での振る舞いなど、日常生活に役立つ教育の場を提供することが重要視された。親がこどもに正しい行動を教えるための機会を増やすことが、将来の日本社会のために重要であるとの指摘があった。

また、親本人の学びや世代間の学びが不足している課題も挙げられた。

[4]．クレームを学びの機会に

クレームを単なる不満ではなく、申し入れた人にも運営側にも大人の学びの機会として捉える姿勢が求められた。

[5]．多世代間の交流とインクルーシブ教育

大人とこども、さらに高齢者が一緒に学べる講座を増やすことで、多世代間の交流を促進する取り組みが提案された。本年度センターで実施した防災とアートをテーマにしたイベントでは、多世代の参加者が集まり狙い通りに進行した。

[6]．今後の課題

年齢や背景に偏りのない、誰でも参加できる講座の開催が今後の課題とされ、特に多世代間の学びの場を広げていくことが検討されている。

7. 事務連絡（副施設長）

次回令和6年度第2回利用者懇談会は3月頃を予定。

8. 閉会（会長）

委員の皆様のご協力により本日の予定を無事終了することが出来た。

これにて、令和6年度第1回利用者懇談会を散会とする。

以上